

震災当時

サト一

地震発生

2011年3月11日の14時46分、マグニチュード9.0の東日本大震災が発生した。発生時、私は自宅でインターネットをしていた。あまりにも大きい地震だったため、思わず座り込みそうになった。あまりにも大きくて長い地震であったため、今でもあの揺れを覚えている。揺れが止まった後、外に出て周辺の状況を見ていた。しばらく周辺の状況を見た後、自宅のテレビで地震のニュースを観た。ほぼ全てのチャンネルで地震のニュースが流れていた。私はしばらくニュースを観ていた。

地震発生から約1時間後、道路から水が流れてきた。なんだろうと思い、また外に出てみると、海水が流れていた。海水はすごい勢いで流れていた。私は海水の流れをずっと見ていた。トラックも流れていた。時間が経つにつれて水かさが増し、腰ぐらいまで増した。まるでプールのような状況だった。津波発生から数時間後、潮が引き始めた。潮の流れはゆっくりだったが、多くのものが潮の流れによって戻された。私はその日、早く寝た。

発生した翌日以降

翌日、私は避難所へ避難した。そこは丘にある小学校の体育館だ。体育館には多くの方が避難していた。多くの方がいたため、自分たちが座るスペースが小さかった。小さかったため、寝る時は寝返りも打てなかった。この翌日から数週間にわたる体育館での避難所生活が始まった。

避難所での生活は想像していたよりも大変だった。食事は十分に摂ることができない、水が出ないため、トイレを流せないなどといった不便なことが多かった。トイレの水が流せないため、衛生面が気になった。一旦、車で自宅に戻ろうとしても、ガソリンを消費してしまうため、車を出せなかった。

発生から数日後、家族や親戚が安否を確認するために避難所を訪ねてきた。お互いの生存を確認することができ、安心した。その後も体育館での生活が続いた。

数週間後、再び親戚が避難所を訪れた。親戚は私を家で預かるために訪れた。私は親戚の家でお世話になることにした。次の日から親戚の家での生活が始まった。

親戚の家での生活は震災前の生活に近い生活だった。久しぶりにこのような生活をし、震災前の生活がいかに便利な生活かといことを感じることもできた。そんなことを感じつつ、生活を続けた。親戚の家で生活している間はコンビニに行ったり、遊びに行ったりして楽しんだ。

帰宅

親戚の家に滞在してから数週間後、実家のライフラインが復旧したということを知り、帰宅することにした。長いようで短い親戚の家での生活だった。帰宅できるのは嬉しいが、寂しさもあった。車で自宅へ向かった。数時間後、自宅に到着した。自宅は畳の部屋が多かったが、室内に畳はなかった。本当に自宅なのか一瞬不思議に思った。

帰宅してから数日後、自宅のリフォームが始まった。部屋だけでなく、廊下やキッチンもリフォームした。部屋は一部の部屋以外はフローリングになった。キッチンは以前よりも明るい雰囲気となった。震災前と同じ生活に戻ったのは4月の終わりごろだった。

近所を歩いていると、建っていた家や店がいくつか取り壊されていた。「震災前までは建っていたのに」と心の中で思った。店は駅の近くに建っていたため、駅前の雰囲気が少し寂しくなった気がした。線路はぐにゃぐにゃに曲がっていた。沿岸の地域はほとんど家が建っていない状態で、まるで砂浜のような雰囲気となっていて、海水の匂いが漂っていた。

ところどころ家は残っていたが、その家には誰も住んでいなかった。その家の状況は津波の甚大さを物語っていた。「沿岸の地域はこれからどうなるんだろう」という心配を抱きながらその場を後にした。

震災を経験し、津波の被害を肌で感じる事ができた。復興が進んでいるが、完了するのはずっと先だろう。被災地は今後どのような地域に生まれ変わるか楽しみだ。